

# 荒木田麗女『月のゆくへ』論

——和歌を中心に——

時 田 紗 緒 里

『月のゆくへ』<sup>1)</sup>は、荒木田麗女（享保一七年～文化三年）によって制作された。明和八年成立で、高倉天皇と安徳天皇の御代を題材とし、その時代に関する作品を多く利用している「歴史物語」である。

麗女の序は、ある人が都から離れて暮らしていたところ、近所の物知りの翁と親しくなって言葉を交わすようになることから始まる。ある雨の日、翁が訪ねて来たので盃を交わしながら話をしていくと、翁が身の上話を始めた。都で暮らし、代々宮仕えしていたのだという。それを聞いて、

上りての世ゆかしう思ふ心深く侍りて、はかなき文などに書きおきたるはおほからねど、見あつめ侍るに、此くのたまふ『今鏡』とか聞え置給ひしを、しるしたるになむ、『續世継』とて、今の世にもてはやし侍る、其のつゞきに、『いや世つぎ』といふなる書のありと聞侍れば見まほしくて、年頃もとめわたりぬれど、世にあまたもなきにや、今にえみ侍らず。かへりて其のさしつぎなる『増かゞみ』はやう見侍りしに、中なる一種を欠ぬるなむ、常に本意なく口をしう思ひ給ふるを、さては其代の事知り給へる事ありぬべければ、かかるをり、かたはし計だに

語り給ひなむや。

と頼み、それを受けて翁が語るのが、『月のゆくへ』の物語である。以上から、『月のゆくへ』が、散逸した「歴史物語」、「弥世継」を補い、『今鏡』と『増鏡』の空白を埋めて、一連の歴史を完成させることを目的として書かれていることが分かる。その構造も共通するところが多く、麗女が『月のゆくへ』を四鏡に倣った「歴史物語」として意識していることは明白である。

「歴史物語」は、すでに起こった出来事を、一つの物語として後世から作者を通して提示される。よって、「歴史物語」からは、作者の一貫した目的意識を見出すことができる。また、その目的意識によつて構成された主題が存在するのである。

では、麗女の目的意識と、『月のゆくへ』における主題とは、いかなるものであったのか。

先行研究<sup>3)</sup>を私的にまとめれば、

一、自らを紫式部と重ね、『源氏物語』を模した擬古物語を制作する。

二、合戦描写を極力減らし、典拠となる作品を公家の日記類を優先させて、公家の視点から平家の貴族的な面を描く。

三、『月のゆくへ』は、平安末期の動乱の時代を題材としているが、あえて天皇・公家が政治を行い栄えていた平安時代の宮中のように描いて、麗女が生きた江戸時代の文治政治との連続性を示して徳川の世を寿いでいる。

以上の三点ということになるのか。

一点目は、本文の跋文に麗女自ら記す序の、

さき／＼も聞えし紫式部の六十帖の草子は、葉月望より書はじめ給ふとき、しに、今は其夜しも筆をとゞめ侍ることもやうかはりつれど、さりぬべき事とおもふなむおこがましかりき。

に基づくものである。『月のゆくへ』が『源氏物語』を意識していることは間違いない。ただ、前述したように、麗女は『月のゆくへ』を単なる歴史を題材とした物語作品ではなく、四鏡の流れを受け継ぐ歴史物語として書いている。従って、麗女が歴史物語を制作するために、紫式部や『源氏物語』を意識したのは何故か、ということ を考察する必要がある。

二点目の、公家の視点からの平家を描くということは、単にそれ自体を『月のゆくへ』の主題とするのは不十分で、麗女はどのような目的意識を持ってそのような描き方をしたのが主題として問われるべきである。その主題を、三点目の文治政治、ひいては徳川の世の讚美とするのは、一つの可能性ではある。歴史を題材とし、天

皇について描かれる性質上、「歴史物語」は政治と完全に無関係ではあり得ない。ただ、『月のゆくへ』が執筆されたのが江戸時代中期であること、麗女が伊勢神宮に深い縁があることを考え合わせれば、徳川讚美という政治的主張を主題としたとは考えにくい。中世以前に書かれた「歴史物語」が持つ政治的主張は、作者と密接に関わるもので、作者は当事者意識を持っていた。だが、近世期の麗女の当事者意識は、既存の「歴史物語」作者とは大きく違っていると考えるべきである。『月のゆくへ』が擬古物語とされる所以は、時間的隔たりによる、描く時代の実態と物語世界との乖離だけでなく、「歴史物語」作者が持つ当事者意識の差にもあるだろう。

本論文は、以上を踏まえて、『月のゆくへ』における「月」の指し示す所によって主題を改めて考察するものである。

まず、荒木田麗女について確認する。麗女は、連歌師として活動しながら多くの著作を残した。父は伊勢内宮地下権禰宜榎倉権之進（荒木田武遠）で、母はその継室で、羽黒彦助（秦英満）の娘である。伊勢国山田下之郷に生まれ、麗女の四人の兄は幼少のころから学問に励んでいた。麗女も兄達が通う学校への入学を望んだが、女子の身であるために両親が許さなかった。しかし、兄達が麗女の学問への情熱と才能を見て、師となって教え導いてくれた。

十三歳のとき、麗女は叔父の荒木田武遇の養女となる。武遇は、麗女の学問好きを歓迎し、積極的に手助けをした。この両親とは異なる教育方針は、武遇が伊勢神宮外宮御師であったことに起因する。御師は、契約した檀家が個人的な祈禱を望んで伊勢神宮に参詣した際、衣食住を提供しもてなす旅館業も兼ねることもあった。檀家との交流は家族ぐるみのもので、麗女に高い教養があること

は家にとっても有益だったのである。養父の理解を得て本格的に学問、連歌に打ち込み、高い教養を身につけることができた。

二十二歳のとき、笠井家雅と結婚した。武遇には実子がいなかったので、家雅は荒木田家の婿養子として迎えられ、麗女とともに荒木田家を継ぐこととなった。家雅もまた好学の人で、麗女の教養の高さを愛した。麗女の著作活動は、家雅のすすめによって始めたものである。また麗女のために自ら書写した本を数多く与え、また麗女が書き上げた本を清書する等、麗女の著作活動を全面的に支援した。豊宮崎文庫の豊富な蔵書を自由に読むことが出来る恵まれた環境も手伝って、二種十七巻の歴史物語と、五種十七巻の日記、紀行、随想の他に四十七種二百十六巻の作り物語と、多岐に渡る膨大な量の作品を残している。

『月のゆくへ』は、明和八年に成立した、二巻三冊の歴史物語である。編年体で書かれ、一巻は高倉天皇、二巻・三巻は安徳天皇の時代を題材とする。数多くの歴史資料を利用しており、森安雅子氏が、『平家物語』『源平盛衰記』『百鍊抄』『愚管抄』『玉葉』『帝王編年記』『山槐記』、『建礼門院右京大夫集』『千載集』『新古今和歌集』『玉葉和歌集』を主だったものとして挙げている。<sup>4)</sup>

本作品の構成は、彦根藩儒野村東皐（淡海野公臺）による序、麗女による序、本文から成る。前に引用した麗女の序に、ある人物が老人から聞いた話を書き留めたという本作品の形式が示される。本文と連続して最後に跋文がある。老人の話聞いた人物がどのような人物なのかは明記されていない。跋文にあたる部分は本文に含まれているので、その跋文は老人の話聞いた人物によるものとまず考えられる。また同時に内容は、麗女自身が作品に対して書いた跋

文とも読み取ることが出来るので、麗女自身を聞き手として設定したものとも思われる。ただ、あくまで物語世界の中における聞き手であるから、本作品の形式は、ある物語の語り手と聞き手が存在して物語世界の枠組みを構築し、作者がその枠組みの外にいるという「枠物語構造」<sup>5)</sup>をとっているという福田景道氏の指摘は妥当であろう。以上の典拠と形式から、『月のゆくへ』の構成を整理していく。典拠作品<sup>6)</sup>の利用の程度・方法から『月のゆくへ』の構成を具体的に示すと、以下になる。

【表一】

- A 史実の枠組み 『百鍊抄』『帝王編年記』  
B 記事の構成 ①『山槐記』『玉葉』  
C 文学性・表現 ②『平家物語』『源平盛衰記』（建礼門院右京大夫集）  
③『和歌集』『建礼門院右京大夫集』『頼政集』『千載集』『新古今和歌集』『玉葉和歌集』

まず、「国史」として捉えられる漢文資料を骨格として（表一）A）、公家の日記（表一）B①）と、物語・説話類（表一）②）で記事を増補する。時には物語で描かれる時代と同時代の資料ではない物語作品（表一）C）の表現を借り、和歌を組み入れることで文学性を醸している。記事の増補に、虚構の多くある『平家物語』『源平盛衰記』を中心に利用し、同じ内容の記事が複数の文献にある場合、正確さよりも詳しさや文学性をとることがあると指摘される<sup>7)</sup>。加えて、『月のゆくへ』の舞台である時代を書かない『源氏物語』

や『榮華物語』の描写を多く取り入れることは、『月のゆくへ』の特徴たる優美な物語世界の生成に成功する一方で、史実からさらに離れていくという事態を招いた。それが故に、『月のゆくへ』が形式を四鏡に借りたに過ぎず、所詮は擬古物語の限界として捉えられてきたように思う。

しかし、『歴史物語』とは、史実に正確であるということでのその価値を判断できるものではない。史実に忠実にするには出来る限り客観的事実のみを書くことになり、人物の心情や物事の描写を詳細にすればするほど、主観的な情報が多く含まれる。しかし、あえて人の目を通した物語形式で物事を詳細に描くことは、ある意味で出来事をより正確に伝えることにもなり得る。『歴史物語』の価値を歴史伝達という点に見るならば、そこに麗女の「歴史物語」の存在領域がある。『月のゆくへ』の東阜序文よれば、

：（略）而中古之風俗、歷世之盛衰、亦可縁焉以一二矣。今夫諸鏡諸語之屬、其所記載鮮有關係大体。然亦或可以補史之欠文矣。

（而して中古の風俗、歷世の盛衰、亦縁て以て一二を考ふべし。今それ諸鏡諸語の属、其の記載する所大体に關係有るもの鮮し。然れども亦或は以て史の闕文を補ふべし。）

と述べており、四鏡やそれに類する書、また『源氏物語』といった物語類にも歴史資料としての価値を見出している。『源氏物語』は人物や出来事が架空ではあるが、当時の様子を知ることが出来る資料と捉えられていたのだろう。また、

至如有才学善著述者、則若清紫赤染之流、其書雖以方語乎。

（才学有りて著述を善くする者の如きに至りては、則ち清紫赤染之流の若き、其の書方語を以てすと雖もや。）

とあり、彼らの周辺では『源氏物語』と『榮華物語』が並ぶのが常であった。その『榮華物語』作者と見なされている赤染衛門は、歴史を書く方法として、史実の枠組みを利用しながら、『源氏物語』の影響を受けてかな文字で叙述する「歴史物語」の形式をとった。麗女が『源氏物語』、『榮華物語』を作品に取り入れた理由は、流麗な文体や物語性といった文学的な表現の手本としてだけではない。『弥世継』を補う「歴史物語」を制作する、という目的を十分に意識したからこそ、物語性の強い作品や主観的な資料を積極的に採用したと思われる。『源氏物語』『榮華物語』が持つ歴史伝達方法と、その作者達の系譜に自らを並べ、歴史認識を受け継ごうとしたのである。

その歴史認識は、和歌の利用によって端的に知ることが出来る。

『月のゆくへ』には、和歌が五十二首挿入されている。自作の和歌は一首だけで、他は全て和歌集などから採っている。和歌全五十二首を、森安氏の典拠一覧に従って各典拠作品ごとにまとめると、次のようになる。

【表二】

千載和歌集	建礼門院 右京大夫集	玉葉集	新古今和歌集	その他
15	10	10	5	新勅撰和歌集 本朝語園 頼政集 平家物語 新拾遺和歌集 自作
				1 1 2 2 4

一番多いのは、『千載和歌集』からの採用である。そして採用数の多い『玉葉集』『新古今和歌集』も勅撰集であるのに対し、『建礼門院右京大夫集』だけが、私家集である。全体の五分の一近くを占めていることが非常に目を引く。

さらに、引用和歌の作者を身分ごとに分類して示す。

## 【表三】

## 【武家】

源頼政（4） 平行盛（3） 平忠盛（2） 平経盛 平康頼  
平時忠 重盛北の方

## 【公家】

建礼門院右京大夫（8） 藤原実房（3） 定家（2） 藤原兼光（2） 徳大寺実定（2） 藤原永範（2） 小侍従（2） 俊成 式子内親王 藤原清輔 健御前 藤原為家 源通親 源資賢

## 【皇族】

高倉院（2） 後白河院

## 【僧】

法印忠快（2） 西行（2） 俊恵 全性法師 全真

※表記のないものは一首

※その他一首を除く、全五一首

武家、公家、僧のなかで公家の歌が多く採用されている。その理由は、『月のゆくへ』が宮中を中心に展開される物語であるため、合戦や武家の抗争を主眼としていないことが知られる。源頼政の和歌の採用数も四首で、建礼門院右京大夫に次いで多い。これは、武家の和歌作者の総数に対する平氏の割合の多さをならすためであったと思われる。源頼政の和歌が多いことで、出来る限り平氏・源氏どちらかに偏った印象を与えない意図が見受けられるのである。建礼門院右京大夫を除いた全和歌を勢力ごとに分類しても、万遍なくどの勢力からも和歌を採用しているようで、『月のゆくへ』の和歌は、特定の身分や、平氏、源氏、もしくは藤原氏勢力、高倉院勢力、後白河院勢力等の特定の勢力に偏らないよう意識して配置されたとの推測が出来る。

このように、建礼門院右京大夫の歌以外を分析すると、均衡を保とうとしていることが伺えるため、かえって群を抜いて多い建礼門院右京大夫の和歌数が目立つ。私撰集である『建礼門院右京大夫集』を重視していることに加え、なかでも一女房に過ぎない建礼門院右京大夫の歌を多く選んでいることが、『月のゆくへ』の大きな特徴の一つということが出来るだろう。

『建礼門院右京大夫集』は、平安末期・鎌倉時代前期の女流歌人で建礼門院に仕えた女房、建礼門院右京大夫が編纂した私家集である。約三百六十首が収められ、長文の詞書が書かれる歌が多いので、歌物語的な要素を持っている。

『月のゆくへ』は、合戦描写に重点を置いておらず、軍記物と呼ばれる『平家物語』『源平盛衰記』とは明らかに制作意図が異なることが既に指摘されている。<sup>9)</sup> 森安氏は、

麗女の書いた『月の行衛』の世界とは、一貫して都を中心とした歴史を貴族階級を主役として書いたものであった。そこには、平氏と源氏という武士階級を主役として平氏の滅亡を描いた『平家物語』『源平盛衰記』とは異なった視点から歴史を語ろうとしていた作者の態度が伺えるのである

と述べている。『月のゆくへ』における『建礼門院右京大夫集』の利用は、『平家物語』等とは異なる人物造型を可能にし、『建礼門院右京大夫集』を、平家裏面的に利用することに成功した。『平家物語』『源平盛衰記』が武家側に寄った軍記物であるのに対して、『月のゆくへ』を公家側に寄った歴史物語とするために、『建礼門院右京大夫集』の利用はまことに有効であった。

しかし、単に公家の視点を求めるだけならば、『山槐記』、『玉葉』など、政治の中枢にいた公家の日記が存在しており、実際に『月のゆくへ』に利用されている。これらの不足分を補うだけにしては、『建礼門院右京大夫集』から十首の採用というのはいささか多すぎるのではないか。例えば、『月のゆくへ』の巻一の下に、建礼門院が無事安徳天皇を出産して宮中がめでたい霽開気に包まれる場面であ

宮の右京大夫の君は、日頃まかでてありけるが、この御事を伝へ聞きて、里にて遥かに思ひやりたてまつりて、  
雲のよそにきくぞかなしき昔ならばたちまじらる、春の都に<sup>11)</sup>

と、建礼門院右京大夫の和歌と詞書を挿入する。話の流れ上、建礼門院に対する祝いの歌や、皇族・平家を賛美する歌が妥当であろう。

一見不自然なこの歌があえて採用されているのは、麗女が建礼門院右京大夫を『月のゆくへ』における重要人物と設定しているからに他ならない。

前述したように、麗女は『月のゆくへ』を客観的に書く事を目指していない。客観的に書くことで省かれてしまう、人物の心情や感情的な部分にこそ重きを置いている。そのために、老人という語り手を設定して語らせているのであるが、麗女自身が経験したことを基にして内容を描くことは出来ない。故に、実際に出来事を見聞したその時代の誰かの視点を必要とする。そこで選ばれたのが、建礼門院右京大夫であった。

建礼門院右京大夫は建礼門院に側近く仕え、女房でしか知りえないような様子・日常を知り得る。『建礼門院右京大夫集』では、建礼門院や高倉院、平家の公達の人間的な面が描かれ、政治的な立場を離れた姿が見出せる。麗女は『月のゆくへ』に『建礼門院右京大夫集』を取り入れることで、『建礼門院右京大夫集』で描かれる建礼門院の後宮の様子と栄華を再現しようしたのである。

『月のゆくへ』は、「翁」の話を「翁の話の聞き手」がそのまま書いた形式を持つが、「翁」の話の内容は、『弥世継』の内容であるため、『弥世継』の話の語り手、もしくは『弥世継』で書かれる出来事を見聞した人物の存在が必要となる。『弥世継』は、散逸してしまつてその内容を知ることが出来ないが、『増鏡』の序文において、

まことや、いや世継は、隆信朝臣の、後鳥羽院の御程までをしるしたりとぞ見え侍りし。<sup>12)</sup>

と、鎌倉時代の藤原隆信が『弥世継』の作者であると述べている。現在『弥世継』の作者が藤原隆信であるとの特定は出来ない。だが、少なくとも『増鏡』によってそう言われていることで、麗女が藤原隆信が作者であると認識していた蓋然性は高い。

隆信は、建礼門院右京大夫の恋人の一人で、『建礼門院右京大夫集』にも多く和歌の贈答が見られる。麗女が、藤原隆信が書く『弥世継』の内容を考えたとき、隆信の身近な女房で、建礼門院や高倉天皇を間近で見ている建礼門院右京大夫の視点から語られる物語と想定して『月のゆくへ』を制作した可能性はあろう。

その可能性を前提として、『月のゆくへ』における『建礼門院右京大夫集』の利用を見ていくと、次の和歌がある。

雲の上にかかる月日の光見る身のちぎりさへうれしとぞ思ふ

この歌は、『建礼門院右京大夫集』では第一首目に置かれている。宮中を雲の上として、高倉天皇を「日」に譬えて対する建礼門院を「月」とし、権勢を誇る二人に間近く仕える喜びを歌っている。『建礼門院右京大夫集』の「月」を詠んだ歌は一七首で、人物を月に譬えた歌は七首である。そのうち建礼門院を月に例えた歌は、前掲のものに加えて、

恋ひわぶる心を闇にくらさせて秋の深山に月は澄むらむ  
影並べ照る日の光かくれつつひとりや月のかき雲るらむ  
仰ぎ見し昔の雲の上の月かかる深山の影ぞかなしき

の三首がある。残りの三首は、高倉天皇、建春門院と、同僚の女房を「月」に例えた歌がそれぞれ一首ずつであった。和歌の言葉として「月」はよく使われ、また人を「月」に譬える歌も多くある。しかし、人を「月」に譬えた歌の七首中四首が、建礼門院を「月」に譬えている上に、恋人である資盛を「月」に譬える和歌が一首もないことは注目すべき点だろう。『建礼門院右京大夫集』における建礼門院は、建礼門院右京大夫にとって過去の宮中や栄華の象徴たる人物であった。冒頭で、建礼門院右京大夫は、なんの憂いもなくただ二人を寿ぐ。平家滅亡後には、月のない星空を見て、

月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵知りぬる

と詠むのも、建礼門院右京大夫にとって「月」が自らが宮中にいた頃の華やかな日々や、今は亡き平家の人々の思い出と結びつくが故である。平家が没落して世の中が変わったのにも関わらず、何も変わらない「月」を見て、悲しみに襲われる。またその一方で、あるのが当たり前だと思っていた「月」のない空を見ると、その空と自らの人生とを重ねて、その美しさに希望を見出したのではなかろうか。

『月のゆくへ』においても、「月」という語は非常に重要な語である。『月のゆくへ』という題名にもある上に、『月のゆくへ』中の和歌で唯一麗女自作の和歌である、

あくがる心のはてはちとせともかぎりぬ月のゆくへとぞおもふ

にも見える。この和歌は、『月のゆくへ』の終わりである跋文のさらに最後に位置する自作の和歌であるから、麗女が三十一文字で『月のゆくへ』という作品全体を表したものであり、本作品の主題を提示している和歌だと言える。『月のゆくへ』について建礼門院右京大夫と『建礼門院右京大夫集』の重要性を考えてみれば、ここに『月』を読み解く鍵がある。『月のゆくへ』に採用されている『建礼門院右京大夫集』の和歌の『月』は、建礼門院を指している。ならば同時に、『月のゆくへ』という題における『月』もまた建礼門院を象徴する語として見ることができるのではないか。

『月のゆくへ』の物語は、平家が滅亡したあと、建礼門院の行く末を語り幕を閉じる。

先帝の浅ましかりし御宿世を、ものうく悲しき事に思ひて、後の世の闇路のひかりなるばかり、まめやかに佛の道をなむ、願はせ給ひ、まぎる、方なく、つとめさせ給へる、いと尊き御様に侍り。さぶらふ人とても、大納言の局、阿波内侍などばかりにて、松風の音物さびしく、櫓の煙かすかなる御住居なれど、後には昔の心よせなる人も、とぶらひ参り、一院さへおとづれ聞こえさせ給へり。

とあって、この後は、源氏方の処遇と今後の物語が増鏡に続いていくことへの示唆で締めて跋文となる。主役であるはずの高倉・安德両天皇は建礼門院との関わりで描かれ、建礼門院の消息が物語の最後となっている。いわば建礼門院の伝記の物語とみなすことが出来るよう。本物語の主題は、建礼門院の生涯を描くことだったのである。

『月のゆくへ』の本文の、跋文に当たる部分を再び引用する。

さき／＼も聞えし紫式部の六十帖の草子は、葉月望より書はじめ給ふとき、しに、今は其夜しも筆をとゞめ侍ることもやうかはりつれど、さりぬべき事とおもふなむ

おこがましかりき。名をばいかゞいはむと思ひわづらふたるに、月をみる／＼人の月の行へなどぞいはめと聞え給ふに、いとうれしうまことにいみじき名なりとゆゑありておぼえぬさりし

とある。『月のゆくへ』という題名の由来についてのこの一文の、『まことにいみじき』というのは、何に對してのことなのか。

漢代、皇后の住まう宮殿は、長秋宮といった。それにより、和歌において「秋の宮」「秋のみ山」という語は中宮御所を指す語として使われる。『月のゆくへ』が、八月十五日の、秋の月が満ちた夜に書き終ったことから、「秋のみやま」、「秋の月」を連想させ、中宮御所、ひいては中宮を連想させる。つまり、八月十五日という中宮を連想させる秋の月の夜に、建礼門院という中宮についての物語が完成した、ということでのこの題名が最適だと考えたのだろう。

本物語の最後、跋文に当たる部分は、麗女の自作の和歌は、神宮文庫本系統の、盛岡中央公民館蔵『月のゆくへ』では、

あくるる心のてはち、とせともかぎりぬ月のゆくへとぞおもふ

となっているが、近藤瓶城編『改定史籍集覧二』は、



あくかる、心のはては千さ、ともかきらぬつきのゆくへとそ思ふ

となっていて、前者は「ちさと」後者は「千さと」と、異同が見られる。(傍点筆者)『改定史籍集覧二』は底本が不明で、両者の違いはおそらく「千歳」とあるものを改めたために違いが生まれたのだろう。この場合、「千さと」を「千里」ととり、物理的な距離と捉えるのは誤りで、両者「千歳」として時間的な隔たりであると捉えるべきであろう。和歌の意味は、「体から魂が離れるほどに思い焦がれるのは、永遠に変わらない「月」の行く末である」となる。

『月のゆくへ』は、高倉天皇と安德天皇に御代について書かれる。しかし、高倉天皇は後白河院と平清盛との対立などに翻弄されて政治的影響力は弱く、安德天皇は幼すぎた。そして、どちらの天皇も若くして亡くなってしまう。建礼門院は、高倉天皇の妻であり、安德天皇の母である。両天皇の姿を間近で見て、どちらの死にも直面する。さらに自身も国母栄華の絶頂を極めながら、底辺まで没落する。女性として経験しうる生き様として、建礼門院ほどの落差は、歴史上類を見ない。その生涯は、まさに移ろう「月」のようである。しかし、「月」が満ち欠けをして移ろうように見える一方で、「月」のあり方は変わることがない。同じように満ち欠けを繰り返し、存在し続ける。『建礼門院右京大夫集』において、建礼門院や高倉天皇を寿ぐ歌は、そのような「月」の有り様の、永遠性から詠んだものである。

どんなに時間が経っても、過去に起こったことは史実として変わることがない。にも拘わらず、建礼門院の人物像は、捉える人や時

代によって様々に変化し、評価を変える。しかし、世情が変わっても、建礼門院自身とその生涯は変わっていない。永遠に変わることのない「月のゆくへ」とは、「時代に翻弄されて移ろうように見える建礼門院の生涯」と、さらに「時代によって評価を変える建礼門院像」を指すのである。「あくがるる心」の持ち主は、翁の話を聞いて書き留めた人物であり、作者麗女でもある。麗女は『月のゆくへ』の物語で建礼門院像を提示し、最後に自作の和歌で改めて、読者にとつての建礼門院像を問いかけているのである。

麗女は、客観的な史実の追求ではなく、物語性を『月のゆくへ』に持たせた。『源氏物語』、『栄華物語』の流れを意識し、歴史伝達意識を以て「歴史物語」を制作したのである。

また、『月のゆくへ』執筆の動機は、麗女の建礼門院への共感であった。同じ歴史上の出来事を題材としながら、建礼門院は様々に評価されてきた。近世中期に至っては、とても国母であったとは思えないような負の評価もされている。だが麗女は、既存の歴史資料からその本質を考察し、自分なりに歴史解釈することが出来た。「歴史物語」たる条件の一つが当事者意識であるとするならば、それは麗女からの建礼門院への共感という軽いものであっただろう。『月のゆくへ』は、政治的な意図を含まない。しかしそれによって、「歴史物語」としての価値は、損なわれるものではない。『月のゆくへ』には、麗女の歴史に対する意識と、建礼門院の伝記的物語によって新たな建礼門院像を提示するという、一貫した目的意識が見出せる。まさしく「歴史物語」としての価値を持たせることに成功しているのである。

注

(1) 本稿では、神宮文庫本系統の、盛岡中央公民館蔵『月のゆくへ』（御巫清直蔵の、文化十四年十月六日泰光基の写本の転写本）を底本とし、活字本数冊を適宜参考にして翻刻を行った。濁点・半濁点、句読点、鍵括弧は適宜補った。

(2) 本稿における「歴史物語」とは、史実を題材としてかな文字で書かれた物語風の史書「四鏡」に加え、『栄花物語』、『秋津島物語』、それらを念頭に近世期に作られた物語『月のゆくへ』『池の藻屑』を仮にそう呼ぶ。

(3) 尾上八郎氏「月のゆくへ」の解題（『校註日本文学大系』第十三卷大正十五年 誠文堂新光社）、森安雅子氏『荒木田麗女の歴史物語についての研究…『池の藻屑』と『月の行衛』を中心に』（平成二三年 豪風出版有限公司）、船戸美智子氏『『池の藻屑』と『月のゆくへ』』（『国文学—解釈と鑑賞—』第五四卷三号 平成元年三月）等を参考とした。

(4) 森安雅子氏『『月の行衛』典拠一覧』（岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第十四号 平成十四年十一月）

(5) 福田景道氏によって定義される。（『月のゆくへ』の輪郭 — 梓物語形式の継承と変容—（『島大国文』三三三三号 平成二三年三月）

(6) 森安雅子氏の挙げられた典拠作品を参考とした。注(4)参照。

(7) 森安雅子氏「『月の行衛』と『山槐記』（『國語國文』第六八卷第八号 平成十一年八月）で指摘されている。

(8) 注(4)参照。

(9) 尾上八郎氏「『月のゆくへ』の解題」より。注三を参照のこと。

(10) 森安雅子『荒木田麗女の歴史物語についての研究…『池の藻屑』と『月の行衛』を中心に』。注(3)参照。

(11) 本稿での『建礼門院右京大夫集』本文の引用元はすべて久保田淳氏校注・訳『新編日本古典文学全集』四七卷（平成十一年 小学館）。

(12) 中山春昌氏編『校註日本文学大系』第十二卷（大正十五年 誠文堂新光社）より引用

※ 本稿の内容は、二〇一五年十一月十日に開催された、日本文学協会第七十回大会でのラウンドテーブル発表、「散在する国学者とその文事」において、本稿と同題で発表した。